

# 常照

第797号

## 人生最後の 迎え方

五十歳を迎えました。歳のせいもあるのか、最近死についてよく思うことがあります。また、僧侶という立場柄なのか多くの方の最後に立ち会うことがあります。そこで思うことは、結局のところ人はどんな生き方をしようと必ず死

を迎えなければならぬということとです。大勢の方に見送られる人、だれにも見送られることのない人、社会に貢献した人、罪を犯した人、お金持ちの人、無一文の人、オリンピックでメダルをもらった人など。因果の法則で縁あってこの世に生を受けた者はどのような人生を送ろうとも、必ず死を迎えなくてはならないということです。これは太古の昔より変わらない不変の真理です。

ではこの事実を見て私は何をすべきか、何を考えるべきか、どうあがいても人は死ぬのだから、「ポーとして」死ぬまでの時間を過

ごすのもひとつの生き方でしょうし、自分の煩惱の赴くままやりた  
 いことだけをして生きるのもひとつの生き方でしょう。また世のため人のため、慈善活動をするのもいいでしょう。一度きりの私の人生なのだから。でも私は何だか「力」が湧いてこないのです。これはなぜなのか。何が不安なのか。何のために生きているのか。何をすべきなのか。そこがわからない。結局取り敢えず、おなかがすくので食べるために働く。家族がいるので養うために働く。ただそのことの繰り返し……

### 『働きアリの法則』

私は生き物が好きだ。特に虫を見るのが好きだ。この間も天氣の良い温かい日、アリが巢の入り口付近を忙しく働き回っていた。この光景を見ていつも思うことは、アリは何を考えているのだろうか。何のために生きているのだろうか。多分何も考えていないと思う。でも、「一寸の虫にも五分の魂」ということわざもあるから少しは何か考えているのだろうか。ア리를捕まえようと手を伸ばすと逃げる。これは捕まりたくないからだろう。やはりアリにも意志があるのだろうか。皆さんご存じでしょうか。「働

キアリの法則」。二対六対二。働きアリの二割は一生涯懸命働きます。そして六割は普通に働きます。しかし残りの二割はサボっているそうです。でも不思議なことに、一生懸命働く二割のアリだけを集めてしばらくして観察すると、その法則に従って二割は一生涯懸命働き、六割は普通に働き、残りの二割はサボるそうです。普通に働くアリもしかし、サボるアリも同じくしかり。私たち人間社会もアリと同じではないかと思うことがあります。例えば、刑務所。娑婆の世界で問題を起こしてしまっただけですが、その方たちが集まった刑務所では必ず模範囚の方がいらっ

しゃいます。生活する環境が変わることによつてその立つ位置が変わったのです。つまり「環境」言い換えれば「ご縁」によつて大きく私の生き方、人生は変わるといふことです。歎異抄の中にこのよな言葉があります。「さるべき業縁のもよおせばいかなる振る舞いもすべし」とあります。私たちの人生において、自分の思いとはかけ離れた出来事に何度もぶつかります。そのことの繰り返しで、不安な毎日を送ることも在ります。また自分の人生に虚しさを感じることも在ります。でも、親鸞聖人のご和讃に「本願力にあひぬれば、むなしくすぐるひとぞなき」とあ

ります。私の一生はどのようにな  
 るかはわかりませんが、どんな一  
 生であっても、最後は必ず必ず阿  
 弥陀さまがそのままの私を救い  
 取って下さると誓われています。  
 そのことを頼りに日々過ごしてい  
 ります。ありがたいことです。

南無阿弥陀仏 合掌



六月の常例布教(ご法話)のご案内

○前期 六月七日(日)〜十一日(木)

兵庫教区 多可組 西教寺

講師 川 本法 綱 師

○後期 六月十三日(土)〜十六日(火)

北海道教区 胆振組 皇恩寺

講師 増 山 頭 佑 師

○場所 小樽別院内

○時間 午後二時(法要終了後)〜

午後三時半

浄土真宗のみ教えについて布教使にご法話をして  
 頂きます。どうぞお誘い合わせいただき、ご聴聞に  
 来院くださいますよう、お待ちしております。

発行所

☎047-0017

小樽市若松二丁目四番十七号

本願寺小樽別院

電話 (〇三三四) 二二一〇七四四番  
 FAX 二二九一四〇八〇番  
 テレホン法話 二二七一六六番